

再生医科学研究所

I	研究水準	研究 20-2
II	質の向上度	研究 20-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、平成 18 年度(平成 19 年度のデータ未提出)の教員一名当たりの平均英文原著論文数が 6.16 件あり、そのうちの 1 割が各分野の連携した共同研究論文となっている。知的財産権の出願・取得状況は、平成 18 年度に 12 件の特許出願がなされている。民間への技術移転を進めており、平成 18 年度末現在のライセンス件数は 9 件となっている。研究資金の獲得状況については、科学研究費補助金の採択金額が年平均 3 億 9,000 万円で教員一名当たり 1,200 万円となっている。その他の競争的外部資金の受入れ状況は、受託研究費が年平均 4 億 4,200 万円、寄附金及びその他の外部資金が 2 億 2,300 万円となるなど、極めて活発な研究活動が展開されているなどの優れた成果があることから、期待される水準を上回ると判断される。

「共同利用・共同研究の実施状況」のうち、全国共同利用研究所ではないものの、国内で唯一、ヒト胚幹細胞株を樹立した研究機関として、文部科学省の確認を受けた全国の使用機関に対して、ヒト胚幹細胞株の分配を実施しているなどの優れた成果があることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、再生医科学研究所の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、再生医科学研究所が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

2. 研究成果の状況

期待される水準を大きく上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、ヒト ES 細胞の樹立と応用、組織誘導・組織再構築に関する研究、組織工学とその応用及び移植免疫とその応用についての研究が国際的に高い評価を得ている。特筆すべき点は、世界で初めて確立された iPS 細胞の作成法の考案とその応用は、再生医療に用いる新たな多能性幹細胞株としての可能性を開く画期的な研究として世界で絶賛されていることである。なお、提出された相当数の学術論文の多くが高いインパクトファクター（IF）の国際一流学術誌に掲載されており、卓越した業績と認

められるなどの優れた成果である。

特に、世界で初めて確立された iPS 細胞の作成法の考案とその応用は、再生医療に用いる新たな多能性幹細胞株としての可能性を開く画期的な研究が行われているという点で「期待される水準を大きく上回る」と判断される。

以上の点について、再生医科学研究所の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、再生医科学研究所が想定している関係者の「期待される水準を大きく上回る」と判断される。

II 質の向上度

1. 質の向上度

大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している

当該組織から示された事例は3件であり、そのすべてが、「大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している」と判断された。